



埴谷雄高年表

一九一〇年（明治四十二年）

埴谷雄高、本名般若豊誕生。

戸籍上は一月一日、台湾新竹に生れたことになっているけれども、実際は四一年十二月十九日生。台湾から本籍福島県相馬郡小高町まで届けてるのに日数を要するので、翌年一月一日生れとしたらしい。本名、般若豊。父三郎、母アサの長男。姉初代。父は当時税務官吏、のち、台湾製糖株式会社へはいり、屏東、橋子頭、高雄などの各工場に転任。幼年時代を屏東でおくる。

一九一六年（大正五年）六歳

橋子頭尋常小学校入学。

一九一八年（大正七年）八歳

高雄小学校へ移る。港のある町。

一九一九年（大正八年）九歳

三炭店小学校へ移る。全学級の生徒をあわせて十数名という工場の子弟だけをいれる分校。

埴谷は早熟で、本を読むのが好きだった。外の本の上に乗って読んだり、あるいは家の押し入れの中で蠟燭をつけて読んだりした。小学校時代から大人の書物を手当たり次第に読んだ。やがて、なかでも推理小説（埴谷の頃は探偵小説といった）を耽読、台湾製糖の社員で本を持っている人から借りて読んだ。そのなかに黒岩涙香の本があり、あんなものを読んでも分かるわけがない、と親から言われながら、涙香の翻案もの、デュマの「巖窟王」、ユゴーの「憶無情」他そのほとんど全部を読んだ。

トルストイの「イワンの馬鹿」、ツルゲーネフの小説を絵入り本で読んだ。

一九二〇年（大正九年）十歳

「立川文庫」をたくさん買って来て読んだ。

一九二一年（大正十年）十一歳

この年、母に連れられて「内地見物」へ来て、東京で二ヵ月ほど遊ぶ。このとき重い肺炎にかかり、芝白金の北里研究所に数ヶ月入院した。

北里研究所に入院中に、黒岩涙香のものをたくさん読んだ。翻訳らしい翻訳を初めて読んだのは博文館から叢書の出ていたモーリス・ルブランの『虎の牙』だった。アルセーヌ・ルパンものは『八一三』『奇巖城』などを愛読、シャーロック・ホームズものはのちに「新青年」で必ずはじめに読んだ。これらが「西洋派」の始まりとなった。そして「立川文庫」は卒業したような気になり、西洋もののほうが面白いという気になった。

台湾で映画「海底六万哩」、連続活劇の「人間タンク」「幽霊船」などを見た。日本のものでは、母が好きだったので、沢村四郎五郎、尾上松之助の初出演のものを見たが、空想力をそそ

られなかった。日本のものでは忍術ものくらいしか興味を持てなかった。子供の頃から西洋派だった。

一九二二年（大正十一年）十二歳

三炭店小学校卒業。卒業生僅か一名。台南第一中学校入学。父、台湾製糖をやめ、東京に住む。

一九二三年（大正十二年）十三歳

三月、台湾から東京に移り住む。四月、目白中学校二年へ編入。九月、関東震災あり。映画と濫読の時代はじまる。

目白中学では漱石の『坊っちゃん』、徳富蘆花の『自然と人生』『思出の記』が課外読本で、教室でいちいち読まされた。埴谷は読み方がうまく「般若読め」と先生から言われて始終読むうちにこの二作を暗記するように覚えた（対談『二つの同時代史』）。

ポオもこの頃はじめて読み、「渦にのまれて」に感激した。江戸川乱歩の「二銭銅貨」「D坂の殺人事件」「屋根裏の散歩者」「赤い部屋」などを続けて読んだ。

レールモントフ『現代の英雄』（中村白葉訳、変型小型版、金星堂）にぶつかった。続いて、ゴンチャロフ『オプローモフ』を読み、はじめて小説の味わいを知った。またドストエフスキ『白痴』を読み「文学についての自覚」を持った。

目白中学は自由な雰囲気のある学校で、社会科学を勉強してもかまわなかった。社会科学の本をたくさん読んだことが、のちに共産党に入るきっかけになった。

一九二四年（大正十三年）十四歳

数え年十五歳、板橋の自宅で正月に袴を着て元服の儀式を執り行なった。父からまずお前はもう一人前の男だと、大きな杯に注がれたお屠蘇を飲めとすすめられ、飲んだ。次に短刀を与えられ、切腹の作法を教わった。侍の死の覚悟を諭され、それに反発する。この事件が埴谷が死について考えるきっかけになる。

白井喬二『富士に立つ影』、中里介山『大菩薩峠』を読む。また「古楽」に連載された国枝史郎の『神州瀨瀨城』を愛読。本作は三角関係が基本だが、大きく広げすぎて未完になった。この未完の成り行きは『死霊』の先駆というかたち、と埴谷は述べている（対談『二つの同時代史』）。

七月九日、父三郎は休職満期につき解職となった。

一九二五年（大正十四年）十五歳

中学四年生のとき、第一回目の結核にかかった。これは埴谷にとって衝撃的な出来事であり、人生について深く考える一生の契機となった。

一九二七年（昭和二年）十七歳

目白中学校卒業。在学中すでに結核を病む。

二月頃、浦和の高等学校を受験して不合格となる。一年間、浪人生活を送った。

結核に絶望し、ニヒリズムの極致にいるつもりになり、勉強はしなくなった。「薄暗い」ニヒリズム」が埴谷のなかに根を降ろした。小説の主人公のオプローモフ同様の「怠けぐせ」がすっかり身についた。ニヒリズムのなかで辻潤が訳したマックス・スティルネルの『自我経』（『唯一者とその所有』）を読み、深く印象づけられた。辻潤はロンプローゾオの『天才と狂人』も翻訳、これも埴谷に深い感銘を残す本となった。

父が健康の地であると信じていた北海道の清水に滞在中の七月、芥川龍之介の自殺に衝撃を受ける。清水には本屋がなくて、その先の帯広まで行き、芥川の「或阿呆の一生」の載っている雑誌「改造」と「歯車」の出ている「文芸春秋」を購入。

一九二八年（昭和三年）十八歳

四月十五日、日本大学予科に入学。三・一五の直後、マルクス主義全盛の時代。学内の演劇活動に従事、当時女優の伊藤敏子と知る。のちに地下運動中、同棲、結婚にいたる。

一九二九年（昭和四年）十九歳

スティルネルふうなアナキズムからマルクス主義へ移る。

三部作の戯曲「ソヴェート＝コミュニオン」を起稿、文献を借りるため石川三四郎を二度訪れたがこれは完成しなかった。また、レーニンの『国家と革命』をひっくりかえした『革命と国家』も同時に執筆したが中絶したままになった。いずれも原稿は残っていない。

昭和三年～五年の乱読時代にキルケゴオルの『あれか これか 人生のフラグメント』、パスカルの『パンセ』を読み強く牽かれた。のちにブレイクの『箴言』を愛読、アフォリズム好きになった。『パンセ』のなかでパスカルは人間を「中間者」と規定、埴谷はこのパスカルの規定をあらゆる人間論の手がかりにした。

一九三〇年（昭和五年）二十歳

一月、予科三年にて出席不良で除名さる。プロレタリア科学研究所農業問題研究会を経て、夏、農民闘争社へはいり、雑誌「農民闘争」発行に従事。伊東三郎、小崎正潔、守屋典郎、松本三益、宮内勇、伊達信、中川明德、永原幸男、隅山四朗、遠坂良一、稲岡進、青木恵一郎、松本傑、絲屋寿雄、渋谷定輔などを知る。

初夏、父死亡す。

農民闘争社は昭和五年三月に創立され、昭和七年五月まで続いた。創立した当時は神田三崎町あたりに事務所があった。宮内勇によるとその実体はいわゆる「半非合法」であったという。

「農民闘争」における埴谷の仕事は、最初は、地方の県連本部や支部から送ってくる小作争議などの通信を、雑司ヶ谷の布施辰治弁護士事務所から受けとってきて、それらを煽動的な文章にする原稿書きだった。その後、青砥にあった全農東京府連の事務所へ出かけ、左派の人物と会談し、原稿を書き、割付けをし、雑誌を発送し、といったふうに雑誌発行全般の業務に携わった

。また法被をきて、自転車に乗り小包を遠くかけ離れた幾つかの郵便局へ出しにゆく仕事もした。

一九三一年（昭和六年）二十一歳

五月、「農民委員会の組織について」を「農民闘争」五・六月合併号に中尾敏の投稿というかたちで発表。

春に入党、地下生活に入った。

党機構上の位置は、農民部長が伊東三郎。埴谷は雑誌「農民闘争」内の農民部に直属する伊達信、松本三益、松本傑、埴谷の四人が形成するフラクションの責任者であった。フラクのキャップである埴谷は、いつも農民部の小崎正潔と連絡していた。

一九三二年（昭和七年）二十二歳

三月二十四日、伊達信宅にて逮捕された。埴谷の逮捕は伊東三郎、小崎正潔、伊達信に引きつづくものであったが、「農民闘争」は、残った守屋典郎、松本三益、永原幸男などの手により終刊号が出された。

起訴になるまでの五十数日を富坂警察署の留置場で過ごす。

五月、不敬罪および治安維持法によって起訴され、五・一五事件の日に豊多摩刑務所へ送られた。のちに「私の大学」と呼んだ豊多摩刑務所では多くの本を読み画集も読んだ。

最初に買って読んだのは、出版されたばかりのジョイスの『ユリシーズ』第一巻で、非常に印象に残った。

四方が壁の独房のなかで読んだもののうち、一番面白かったのは哲学に関するものだった。西田幾多郎の『自覚に於ける直観と反省』『善の研究』、スワンテ・アーレニウス『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』、カントの『純粋理性批判』等を読む。

『自覚に於ける直観と反省』の中に「自同律」という言葉が出てくる。当時、西田哲学においても「自同律」が問題になっていた。埴谷は、西田幾多郎の本を読み、「自同律」についての知識とカント哲学の概要について吸収した。それがカント哲学の導きになった。

カントの『純粋理性批判』では、特にその先験的弁証論に震撼された。埴谷は、当時、まだ上巻だけしか出ていなかった天野貞祐訳の岩波文庫を傍らに置いて原書を一語ずつ辿った。

この未決時代に『死霊』の原型を構想した。はじめは「惟観る人」という題が頭にあった。富坂署の留置場の中で暴力をふるう一人の男と出会い、この人間に対して、西田哲学に学んだ「AはAである」という形式論理の出発点である「自同律」に悩んでいる無行動な人間の精神内部を掘り下げてみるというかたちで対立面をつくらうとした。この人物は『死霊』第二章で出てくる筒袖の拳坊という一種暴力的な人物に原型の一部を残している。「一人狼」の首猛夫はそれをいささか純粋化したものである。いざ書くだんになるとだんだん薄れてきて、暴力みたいなものは痕跡だけになってしまった。

一九三三年（昭和八年）二十三歳

十一月、懲役二年執行猶予四年の判決をうけ出所。

一九三四年（昭和九年）二十四歳

高円寺から古祥寺に移り住んだ。

父の死後、般若家にはかなりの預金があったが、埴谷が刑務所にいるあいだに、母が、父の昔の友達で株屋の人番頭になった者に口説かれ、株に手を出した。最初は儲けさせてもらい母は得意になっていた。刑務所で経済雑誌「ダイヤモンド」を読んでいて経済知識も豊富だった埴谷は、何度も警告を発したが母は聞き入れなかった。結局、最後にどうしようもない大損をした。

昭和九年から十四年にかけて、東京・九段下にあった大橋図書館に通い、安田蔵書と印のあるデモノロジー関係の本を読み耽る。そこで『者那教聖典』に出会い、『死霊』の根本的観念を見出す。

一九三六年（昭和十一年）二十六歳

五月十九日、伊藤としとの婚姻届けを出す。

一九三九年（昭和十四年）二十九歳

十月一日発行の同人雑誌「構想」創刊に加わる。

同雑誌十月創刊号から第三巻第二号（昭和十六年十二月）まで「Credo, quia absurdum」を毎回発表。

創刊号に小説「洞窟」の前半「その内界」を発表（後半「その外界」は第二巻第一号（昭和十五年一月）に発表）。

この二つが埴谷の処女作。

同人は長谷川鉦平、木村隆一、郡山澄雄、佐藤宏、栗林種一ら法政大学関係者に埴谷が加わり、それに高橋幸雄、平野謙、佐々木基一、久保田正文、荒正人ら東大組が合流、のちに山室静、佐藤民宝、相沢正、浅羽得三、伊集院哲、木田健太郎、深見圭祐らの名前が名簿に掲載されている。平野謙は埴谷が豊多摩刑務所から出てきた左翼であることに興味を示し、話をした。

冬から翌年春にかけて台湾台北にいた姉の許へ行った。姉の家で「構想」創刊号を受け取った。台北郊外の草山の温泉地へその創刊号を携えて行った。この旅行はのちに戦後になって小説「虚空」を書く機縁となった。

一九四〇年（昭和十五年）三十歳

三月頃、「経済情報社」へはいり、昭和十四年四月一日創刊の「経済情報」の編集に携わる。

東京・丸の内の経済情報社近くに赤煉瓦の建物、丸の内三菱仲四号館七号があった。その中に「昭和研究会」があり、その事務局長が、田中英光の兄の岩崎英恭という人だった。埴谷は岩崎のところへ時折り行く用事があり、ある日、「昭和研究会」の書棚を眺めていたら『ダニユープ』の英語の原書を見つけた。

最初の仕事は随筆を集めることで、葉山嘉樹らに原稿を頼んだ。葉山嘉樹は埴谷の「最も好き

な作家」だった。

八月、「台湾遊記――草山」を「南画鑑賞」八月号に発表。

一九四一年（昭和十六年）三十一歳

五月、雑誌「改造」五月時局版に、エミール・レンギル『ダニューブ』の抄訳を「血のダニューブ」と題して伊藤敏夫の名で発表。

五月一日、経済雑誌「新経済」創刊。編集人は官内勇、発行人は三ツ木隆治、発行所は新経済情報社で、関西支局、神戸支局等が置かれていた。

十二月八日、大平洋戦争はじまる。九日の暁方、予防拘禁により拘引される。このとき「いよいよ殺されるかな」と覚悟した。だが最初の思いがけぬような戦果のため年末日近くに釈放された。

平野謙は昭和十四年十二月に創刊された大井広介が主宰する「現代文学」の編集に力を注ぐ。「構想」と「現代文学」の二つの流れが、戦後の「近代文学」へと引き継がれることになった。

一九四二年（昭和十七年）三十二歳

五月二十五日、埴谷の初の翻訳ものであるエミール・レンギル著『ダニューブ』を地平社から抄訳、出版。妻の結婚前の名が伊藤敏子、その夫だから伊藤敏夫という名前にした。

一九四三年（昭和十八年）三十三歳

六月二十五日、アキム・リヴォーヴィチ・ウォルィンスキイ著、埴谷雄高訳『偉大なる憤怒の書――ドストイェフスキ「悪霊」の研究――』を、興風館から翻訳、出版。

一九四四年（昭和十九年）三十四歳

五月五日、宇田川嘉彦の名前で『フランドル画家論抄』を洸林堂書房より出版。ペンネームの宇田川嘉彦は、洸林堂書房の主人の名前である。当時は絵の本がよく売れた。埴谷は、洸林堂書房から相談され、手元にあったヴェルハーレンの『ルウベンス』を推薦した。だが、企画書の段階で他の出版社が出すことになった。洸林堂ではルウベンスの写真版を全部つくっていたので困った。そこで、ルウベンスが駄目なら、ルウベンスを含めてフランドルの画家を全部やろうということになり、洸林堂ではドイツ語の絵画史の原書を見つけてきた。埴谷はそれを借りて読み本書を書いた。企画書を出す段階になって、無名の筆者では美術の本は出せないことがわかった。それで著名な美術評論家、山田智三郎の「序文」をもらって出版にこぎつけた。

一九四五年（昭和二十年）三十五歳

敗戦の二週間前、丙種合格、二等兵で東京・武蔵野地区の地域の防衛召集となる。東京・武蔵境の関東中学校へ行って寝泊まりし、即席の訓練を受けた。一月に三交替のものだった。教育は訓練だけで、あとは防空壕掘りと建物疎開という建物を壊す仕事をした。

八月十五日、第二次世界大戦が日本の敗戦で終わる。その日、新経済社をやめる決意をした。

敗戦と同時に雑誌「近代文学」を出すことを考え、十月三日、松戸の佐々木基一宅に、平野、本多、埴谷、荒の五人が集まって雑誌名、編集方針、内部組織などを話し合いその日が発足の正式な第一日となった。

十二月二十日、「近代文学」創刊号の製本が完成、同人達は雑誌をリュック・ザックに背負ってあらかじめ注文をとってまわっていた都内の目ぼしい本屋に配本。

一九四六年（昭和二十一年）三十六歳

一月、長編『死霊（一）』を「近代文学」第一巻第一号（一月十日発行）に発表、連載を開始した。

九月、「ラムボオ素描」を「コスモス」三号に発表。埴谷は戦争中の無職時代に、語学とデモノロジーに耽溺、ランボオを読むために、或る友人と語学の交換教授をした。彼はドイツ語を教え、友人からフランス語を習った。長年の蓄積のもと、戦後の出発のなかにランボオ論が加わった。

一九四七年（昭和二十二年）三十七歳

第一次同人拡大、野間宏、中村真一郎、福永武彦、加藤周一、久保田正文、花田清輝、大西巨人、平田次三郎。

一月十九日、「夜の会」が花田清輝、岡本太郎の二人により推進され、椎名麟三、梅崎春生、野間宏、佐々木基一、安部公房、関根弘、中野秀人などとともに会員となる。「夜の会」はその後、昭和二十五年の後半に解散となった。この頃まで、花田清輝と埴谷とは、互いに対の小説を書く約束をするなど、深く影響しあった。この頃、戦後派文学の全盛時。

一月、「花田清輝『復興期の精神』」を「見事な振子運動」と題して、「文化新聞」（六日）に発表。

一九四八年（昭和二十三年）三十八歳

三月、「即席演説」を「総合文化」三月号に発表。雑誌「総合文化」は、花田清輝、関根弘、野間宏、佐々木基一、加藤周一らによる総合文化協会の機関誌で、昭和二十二年から二十三年にかけて、真善美社から発行された。

八月、「太宰治、追悼」を「衡量器との闘い」と題して、「芸術」八月号に発表。

十月、小説「意識」を「文藝」十月号に発表。

三十日、『死霊』（一章～三章）を真善美社より刊行。

十一月、椎名麟三との対談「『死霊』と『序章』をめぐって」を「総合文化」十一月号に発表

。

十二月、詩「寂寥」を「序曲」第一輯（一日）に発表。また同誌に併載された、座談会「小説の表現について」（中村真一郎、武田泰淳、梅崎春生、三島由紀夫、寺田透、野間宏、椎名麟三、埴谷雄高）で司会役をつとめた。雑誌「序曲」は、その頃、戦後派作家の書き下ろしシリーズを刊行していた河出書房が、戦後派作家の結集を意図して出した季刊の同人雑誌であるが、一号

出ただけで終わった。

四日、東京・東中野の「モナミ」で「『死霊』出版記念会」を開いた。山室静、伊藤整、原民喜、片山修三、岡本太郎、関根弘、椎名麟三、花田清輝、本多秋五、荒正人、佐々木基一、久保田正文、野間宏らが出席、作者の前途を祝した。

一九四九年（昭和二十四年）三十九歳

三月、「何故書くか」を「群像」三月号に発表。

八月、「野間宏『青年の環』第一部」を「人間」八月号に「ロマンへの意志」と題して発表。「断崖病」を「東京日日新聞」（二十八日）に発表。

十月、「潔癖症」を「近代文学」十月号に発表。

一九五〇年（昭和二十五年）四十歳

一月、「ものいうオルゴール」を「文藝」一月号に発表。

母アサは湯河原に住む長女初代のところへ行っていた。初代のところには二人の男の子供がおり、孫が可愛いから始終行っていた。そこで脳温血で亡くなった。

二月、「あらゆる発想は明晰であるということについて」を「群像」二月号に発表。

五月、小説「虚空」を「群像」五月号に発表。

六月、「武田泰淳『異形の者』」を「人間」六月号に発表。

八月、「煙草のこと」を「近代文学」八月特別号に発表。

一九五一年（昭和二十六年）四十一歳

「近代文学」の編集兼発行人を本多秋五から引継ぎ、第四六号（一月発行）より引受ける。

一月、「心臓病について」を「近代文学」一月号に発表。

二月、「政治をめぐる断想」を「近代文学」二月号、三月号に発表。

四月、「ニヒリズムとデカダンス」を筑摩書房『文学講座』第五巻に発表。

六月、「平和投票」を「群像」六月号に、原民喜追悼記「『鎮魂歌』のころ」を「三田文学」六月号に、「椎名麟三『水遠なる序章』」を、河出書房市民文庫『永遠なる序章』の解説として発表。

七月、「あまりに近代文学的な」を「文学界」七月号に発表。

八月、「安部公房のこと」、「武田泰淳小論」、原民喜追悼記「『びいどろ学士』」を「近代文学」第五〇号記念号に発表。

十一月、「本多秋五」、「荒正人」を「近代文学」十一月号に、「『禁色』を読む」を「群像」十一月号に発表。

一九五二年（昭和二十七年）四十二年

三月、体の調子が悪かったのは代々木病院で病名が腸結核と判明、十二指腸から小腸まで悪く

、腸結核の末期と診断された。結核の四度目の再発と判ってからは、昭和三十一年夏まで、長い療養生活をおくる。

十月、「観念の自己増殖——十九世紀的方法」を「文学界」十月号に発表。

一九五三年（昭和二十八年）四十三歳

三月、「三冊の本と三人の人物」を河出豊房『ドストエーフスキイ全集』第16巻月報（三十一日）に発表。

七月、追悼記「堀辰雄」を「近代文学」七月号に発表。

八月、追悼記「大井広介夫人」を「近代文学」八月号、九月号、十月号に発表。

十二月、「農業綱領と『発達史講座』」を岩波書店「文庫」第27号（十日）に発表。

一九五四年（昭和二十九年）四十四歳

十一月、「歴史のかたちについて」を「近代文学」十一月号に発表。

一九五五年（昭和三十年）四十五歳

一月、「二十世紀文学」を「近代文学」一月号に発表。

五月、「還元的リアリズム」を「近代文学」五月号に発表。

六月、「迷路のなかの継走者——読者について」を「近代文学」六月号に発表。

七月、「対立者の論理」を「群像」七月号に発表。

八月、「ロビンソンの読書」を「群像」八月号に発表。

九月、「批評基準の退化」を「群像」九月号に発表。

十二月一日、井の頭池畔の「観水」で開かれた「近代文学」百号記念の会に出る。荒、平野、佐々木、山室、本多、病気中の埴谷の編集同人全員が出席。

一九五六年（昭和三十一年）四十六歳

二月、「長篇の時代」を「図書新聞」（四日）に文芸時評として発表。

五月、「永久革命者の悲哀」を「群像」五月号に発表。発表の時期に前後して、ソ連で、スターリンの死後、第一書記フルシチョフによるスターリン批判が行なわれた。埴谷は、我が国におけるスターリン批判のほとんど唯一の予言者の光栄を担うこととなり、高い評価を受ける。このエッセイによるスターリン批判を契機として花田清輝との間で、「モラリスト論争」が起こる（荒正人、大井広介参加）。埴谷は現実の政治からは距離を置いた立場に立つ。

「異常児荒正人」を「新潮」五月号に発表。

七月、「踊りの伝説」を「新潮」七月号に、「ドストイェーフスキイ論考」を「図書新聞」（二十一日）に発表。

八月、「闇のなかの自己革命」を「群像」八月号に、「井上光晴『書かれざる一章』」を「日本読書新聞」（二十七日）に「井上光晴『書かれざる一章』と窪田精『ある党員の告白』」と題して発表。

九月、「ドストエフスキイの位置」を「文学」九月号に発表。

十日、『死霊』（一章～三章）を近代生活社（井上光春経営）より刊行。

昭和二十六年以来の病気が全快の運びに至り、長期の闘病生活に終わりを告げる挨拶状を友人に出す。

十月、「武田泰淳」を「新潮」十月号に、座談会「第一次戦後派の基盤」（野間宏、武田泰淳、椎名麟三、中村真一郎、堀田善衛、埴谷雄高）を「文藝」十月号に発表。

十一月、「椎名麟三」を「新潮」十一月号に、「ドストエフスキイに於ける生の意味」を『現代ヒューマニズム講座4』（十五日）に、座談会「戦後文学の理念」（野間宏、武田泰淳、椎名麟三、梅崎春生、中村真一郎、堀田善衛、埴谷雄高）を「文藝」十一月号に発表。

十二月、「三島由紀夫」を「新潮」十二月号に、「ドストエフスキイの二元性」を青木書店『体系 文学講座』第八卷（二十日）に、座談会「戦後文学の技法と方向」（野間宏、武田泰淳、椎名麟三、梅崎春生、中村真一郎、堀田善衛、埴谷雄高）を「文藝」十二月号に、座談会「ドストエフスキイを語る その一『罪と罰』をめぐって」（米川正夫、吉村善夫、野口啓祐、荒正人、本多秋五、山室静、奥野健男、中田耕治、日野啓三、埴谷雄高）を「近代文学」十二月号に発表。

一九五七年（昭和三十二年）四十七歳

一月、「古い映画手帖」を中央公論社『文学的映画論』（十五日）に発表、座談会「ドストエフスキイを語る その二『悪霊』をめぐって」（米川正夫、奥野健男、日野啓三、山室静、荒正人、埴谷雄高）を「近代文学」一月号に、「透視の文学」を「文藝」一月号に発表。

三月、初めての評論集『濠渠と風車』を未来社より刊行。

前出「文藝」連載の座談会のメンバー梅崎春生、椎名麟三、武田泰淳、野間宏、中村真一郎、堀田善衛、埴谷雄高で親睦団体「あさって会」を結成した。

春頃、京都大学大学院生だった高橋和巳が、近藤龍茂とともに東京・古祥寺の自宅にはじめて来訪。

四月、「夜の思想」を岩波書店『岩波講座 現代思想』第三巻月報6（二十五日）に発表。

四月に河出書房が倒産したため、「近代文学」は二ヵ月休刊。第一一七号から第一二〇号までを東洋時論社が引き受ける。

六月、評論集『鞭と獨楽』を未来社より刊行。

八月、「可能性の作家について」を「全通文化」八月号に、「標的者」を「総合」八月号に発表。

九月、「闇一一組織について」を「短歌研究」九月号に発表。

十月、「深淵」を「群像」十月号に発表。

一九五八年（昭和三十三年）四十八歳

「映画のなかの日本一一木下恵介の映画を見て」を「映画評」一月号に発表。

二月、「二十世紀文学の未来」を「東京新聞」（四日、五日、六日）に発表。「目的は手段を

浄化しうるか——現代悪の中心的課題」を筑摩書房『講座 現代倫理』第二巻（二十日）に発表。

七月、「存在と非在とのつべらぼう」を「思想」七月号に、「指導者の死滅」を「中央公論」七月号に発表。

「近代文学」の経営を小学館が引き受け、九ヵ月ぶりに第一二一号を出す。

八月、「絶望・頽廃・自殺」を筑摩貴房『講座 現代倫理』第五巻（二十日）に発表。

九月、「フルシチョフ主義の秘密」を「世界」九月号に発表。

十一月、「政治のなかの死」を「中央公論」十一月号に、「パステルナークの周辺」を「東京新聞」（十四日、十五日、十六日）に三回にわたって発表。

十二月、「知識人と大衆」を「産経新聞」（二日）に発表。

一九五九年（昭和三十四年）四十九歳

一月、「ハイマートロス」を「河北新報」（三日）に、「『転向』上巻」を「信濃毎日新聞」（三十一日）に発表。

二月、「敵と味方」を「中央公論」二月号に発表。

三月、「表現の自由について」を「週刊読書人」（九日）に発表。ケストラーの公開状の発言にふれている。

四月、「政治の周辺」を「群像」四月号に「文芸時評」として発表。

五月、「闇のなかの思想」を「群像」五月号に「文芸時評」として発表。「竹内好」を「日本読書新聞」（十一日）に発表。

六月、「決定的な転換期」を「群像」六月号に「文芸時評」として発表。

七月、「憎悪の哲学」を「中央公論」七月号に発表。

八月、「夢について——或いは、可能性の作家」を「文学界」八月号に発表。

十月、「ドストエフスキ『作家の日記』」を「文庫」第97号に発表。

一九六〇年（昭和三十五年）五十歳

一月、「可能性の作家——続・夢について」を「文学界」一月号に発表。埴谷はフロイトやハヴロック・エリスの夢についての研究に深い興味を抱き、自らの文学のなかに取り込んでいった。

評論集『幻視のなかの政治』を中央公論社より刊行。

三月、「全学連と救援運動」を「読売新聞」（二十六日）に発表。

五月、「雑録ふうな附記」を「近代文学」五月号、六月号に発表。「海鼠塀の思い出——「新経済」の頃」を「新経済」五月号に発表。「新経済」二十周年記念号の「特別寄稿」。

六月、「大審問官の顔」を筑摩書房『世界文学大系36A ドストエフスキー』月報33（五日）に発表。

十五日、総評・中立労連などの労働組合の日米新安保条約阻上の実力行使があり、参加者は五百八十万人と発表された。

十八日、小学館で「近代文学」同人会をしたあと、荒正人、平野謙、本多秋五、佐々木基一と国会周辺に赴く。日米新安保条約反対のデモ行進があり、埴谷は、国会のまわりをまわったり一人になって国会脇の小道を歩きまわった。そして夜は秋山清とともに国会構内にいた。

七月、「荒エレクトロニクス」を筑摩書房『新選現代日本文学全集38 平野謙・荒正人・高橋義孝・小日切秀雄集』付録31（十五日）に発表。

「自己権力への幻想」を「週刊読書人」（二十五日）に発表。

八月、「六月の《革命なき革命》」を「群像」八月号、特集「文学者の政治への発言」に、「不可能性の作家として」を河出書房新社『グリーン版世界文学全集19 ドストエーフスキイ』月報（二十五日）に発表。

十六日、本多秋五、谷田昌平と黒四ダム工事の見学に行き、松本の浅間温泉に一泊。翌日、大町で佐々木基一夫妻、梅崎春生夫妻らと合流、工事の現場を訪ね、その夜は白馬東急ホテルに泊まる。

九月、「武田泰淳」を新潮社『日本文学会集63 武田泰淳集』（二十日）に解説として発表。

十月、「不可能性の作家——夢と想像力」を「文学界」十月号に発表。

十一月、「選挙について」を「東京新聞」（十日、十一日、十二日）に連載。

十二月、「暗殺の美学」を「中央公論」十二月号に発表。

一九六一年（昭和三十六年）五十一歳

二月、「文学者の性理解」を「群像」二月号に発表。

五月、「渋谷定輔『野の魂と行動の記録』」を「思想の科学」五月号に「解説」として発表。渋谷定輔の詩集『野良に叫ぶ』が出版されるまでの経緯を綴った日記の抜粋が発表されるので埴谷が解説を書いた。

「闇のなかの思想——形面上学的映画論」を「世界」五月号から翌年十月号まで、三十七年一月号を除き、十七回にわたって連載。

六月、「死者の哀悼者へ」を「早稲田大学新聞」（二十一日）に発表。

評論集『墓銘と影絵』を未来社より刊行。

八月、「サド裁判を傍聴して」を「東京新聞」（十一日）に発表。埴谷は、所謂、サド裁判の特別弁護人となる。

十月「ドストエーフスキイにおける表現」をNHKラジオテキスト「教養大学」十月・十一月・十二月合併号に発表。

「悲劇の肖像画」を丸山真男編著『人間と政治 人間の研究 IV』有斐閣（五日）に発表。埴谷の執筆担当は「II 人間からみた政治 三 政治と創造行為」である。

一九六二年（昭和三十七年）五十二歳

一月、評論集『罨と拍車』を未来社より刊行。

安保闘争以後、正月二日に自宅の応接室に集まり「新年会」を開くようになった。

二月、「現実密着と架空凝視の婚姻——純文学の問題」を「群像」二月号に発表。

三月、「若者の哲学——六月一五日の記憶」を「教養」（「教養文庫」の案内書）春号に、「自然のなかの死——忘れ得ぬ断章」を「週刊読書人」（十二日）に、「不可能性の文学——サド裁判での証言」を「信濃毎日新聞」（三十日）に発表。

四月、評論集『垂鉛と弾機』を未来社より刊行。

五月、「サドについて」を「白夜評論」六月創刊号（二十五日）に発表。

「自立と選挙——吉本隆明への回答」を「週刊読書人」（二十八日）に発表。埴谷はレーニンの衣裳をまとっている、という吉本の批判を根底にして、のちに埴谷・吉本の間で論争が繰り返されることになる。

六月、「論理と詩との婚姻」六月号に発表。

九月、「最終意見陳述——特別弁護人として」を「日本読書新聞」（三日）に発表。

十五日、「自立学校」開校集会（東京・文京福社会館）に講師として、谷川雁、吉本隆明らと参加。

十月、「サドの無罪判決を聞いて」を「週刊読書人」（二十九日）に発表。

十二月、「革命的志向なき革命的人間について——《歪みの力学》と《弾力学》」を「群像」十二月号に発表。

一九六三年（昭和三十八年）五十三歳

二月、詩「隕石」を「文藝」二月号に、「モンテーニュとパスカル」を筑摩書房『世界人生論全集8』月報6（二十八日）に発表。

五月、「ドストエフスキイの変貌」を「文学」五月号、六月号、七月号に連載。「吉本隆明の印象」を「一橋新聞」（三十日）。

六月、「ポオについて」を東京創元新社『ポオ全集』第2巻、第1巻、第3巻の月報1、2、3（六月一日、八月十五日、十二月二十日）に発表。「権力の国境」を「independent review」№1（十五日）に発表。「青年大江健二郎」を角川書店『昭和文学全集9』開高健・大江健三郎アルバム（十五日）に発表。

七月、「箴言の記憶」を平凡社『世界教養全集 別巻3 東西 日記・書簡集』月報37（十五日）に発表。

八月、「『散華』と《収容所の哲学》——高橋和巳への手紙」を「東京新聞」（十五日、十六日）に発表。

九月、「夜の思想」を「文学」九月号に「夜の思想——ドストエフスキイ——」、十月号に「夜の思想（続）——ドストエフスキイ——」と題して二回にわたり発表。

十一月、「死滅せざる「国家」について」を「世界」十一月号に発表。

十二月、「闇のなかの黒い馬」を「文藝」十二月号に発表。「《自分のこと》」を「文学」十二月号に発表。「文学」に断続的に書きつがれたドストエフスキイ論の一つである。

一九六四年（昭和三十九年）五十四歳

二月、『影絵の世界』を平凡社『ロシアソビエト文学全集』の葉に「ロシア文学と私」と題し

二月二十五日から四十一年一月二十五日まで、三十五回にわたって連載した。単行本として平凡社より出版されたとき、「魂の同質性」などの小見出しがつけられた。

三月、「苦悩の均衡」を「文学」三月号に発表。本多秋五との対談「ロシア文学と私」を「週刊読書人」（十六日）に発表。

四月二日、「近代文学」終刊を発表する記者会見を小学館で行なう。

五月、「宇宙の墓場——或いは、自殺考——」を「群像」五月号に発表。

六月、「十九年間の変遷」を「群像」六月号に発表。

七月、「メフィストフェレスの能動性」を中央公論社『世界の文学 第5巻ゲーテ』付録18（十二日）に発表。

評論集『甕と蜉蝣』を未来社より刊行。

八月、戦後文学の拠点だった雑誌「近代文学」が創刊以来、通巻百八十五号をもって終刊。

「原民喜の回想」を「近代文学」八月終刊号に発表。「戦後文学十九年の回顧」を「東京新聞」（十七日、十八日）に発表。

評論集『振子と坩堝』を未来社より刊行。

九月、「平野謙」を「群像」十月号に発表。

十一月、「「犀」創刊に寄せて」を「犀」創刊号に発表。同人雑誌「犀」は、「近代文学」に拠る若手の書き手たちが、「近代文学」終刊の後を継ぐかたちで集まった雑誌。四十二年十一月、最初の予定どおり全十冊を出して終刊した。

十二月、「少年時代の漱石」を講談社『日本現代文学全集24 夏日漱石（二）』月報51（十九日）に発表。

一九六五年（昭和四十年）五十五歳

二月、「革命の変質」を「展望」二月号に発表。

三月十三日、東京・新宿の紀伊国屋ホールで催された原民喜をしのぶ文芸講演会で、大江健三郎、草野心平、伊藤整らと共に講演。

「梅崎春生をいたむ」を「東京新聞」（二十日）に発表。

八月、「証人エレンブルグ」を、集英社『世界文学全集28 エレンブルグ・カタージェフ』（二十八日）に「解説」として発表。

九月、座談「文学者の政治参加」（井上光晴、大江健三郎、埴谷雄高）を「群像」九月号に発表。

十一月、NHKブックス31『ドストエフスキエーその生涯と作品』（二十日）を書き下ろし刊行。

「カントとの出会い」を理想社『カント全集・第3巻 前批判期論集2』付録（二十五日）に発表。

一九六六年（昭和四十一年）五十六歳

三月、「暗黒の夢」を「文芸」三月号に発表。

七月、座談「文学創造の秘密」（秋山駿、森川達也、埴谷雄高）を「審美」第三号に、「廃墟の頃」を河出書房新社『現代の文学28 椎名麟三集』（八日）に「解説」として発表。「梅崎文学碑と椎名麟三」を「南日本新聞」（十九日）に発表。

八月、「栗田勇のコレスポダンス」を「人間座」テアトル・ユマニテ特集号（一日）に発表。お茶の水の喫茶店で栗田勇と四時間「自同律」について話をしたとある。「自在圏」を「文芸」八月号に発表。

九月、「『死霊』の思い出」を「神戸新聞」（二十九日）に発表。

十月、「変幻」を「群像」十月号に、「立原正秋の印象」を劇団俳優小劇場『剣ヶ崎』公演パンフレットに発表。

十一月、評論集『彌撒と鷹』を未来社より刊行。

十九日、竹内好を訪問、碁会をつくる話になり、竹内家の電話を使って、三十分くらいで、会員を募り、新碁会「一日会」をつくる。会員は両氏の他、江崎誠致、佐々木基一、真継伸彦、井上光晴、高橋和巳、橋川文三、檜山久雄、岡田愛子、橋本福夫、多岐川恭、結城昌治、駒田信二、八匠衆一、市川宏、白川正芳ら。後に日本棋院に移ってからは、竹之内静雄、中野孝次、那珂太郎、飯島耕一、笠原淳、北村太郎、黒井千次らが加わった。

十二月、「石川三四郎の僅かな思い出」を「思想の科学」十二月号に発表。自伝風なエッセイ集『影絵の世界』を平凡社より刊行。

一九六七年（昭和四十二年）五十七歳

一月、「外と上からの解放——『パリは燃えているか』」を「中央公論」一月号に発表。「自然と存在——戦後文学を中心として」を学芸書林『全集・現代文学の発見 第八巻 存在の探究下』（十日）に「解説」として発表。

二月、「論理と詩の婚姻について——真継伸彦への返事」を「週刊読書人」（二十日）に「わが精神の芸術時代」と題して発表。

三月、「毛沢東の条件反射」を「中央公論」緊急増刊（二十一日）に発表。

五月、「神の白い顔」を「文芸」五月号に発表。

二十日から二十三日にかけて、白川正芳著『埴谷雄高論』の刊行を記念して、埴谷、白川、斎藤、白井哲夫、高橋忠義で山形市へ二泊三日の旅行をした。歓迎会のパーティで埴谷はダンスの名手ぶりを披露した。

七月、「白内障」を「南北」七月号に発表。

九月、「追跡の魔」を「文芸」九月号に発表。

十月、「『資本論』と私」を「図書」十月号に発表。

一九六八年（昭和四十三年）五十八歳

一月、「宇宙の鏡」を「文芸」一月号に、「辻邦生のこと」を「東京新聞」（一日）に発表。

七月、「裂け目の発見——文学的小伝」を「未来」七月号に発表。

十七日、読売ホールで開かれた第五回日本近代文学館夏期講座「日本近代文学と外国文学」

で「ドストエフスキイの撰取」と題して講演。二十四日、初の海外旅行であるヨーロッパ旅行に辻邦生と一緒に出発。

八月、「夢のかたち」を「文芸」八月号に発表。座談「デカダンス意識と生死観」（三島由紀夫、村松剛、埴谷雄高）を「批評」第十二号、夏季号（十五日）に発表。

十月、高橋和巳との対談「夢と想像力」を筑摩書房『文学のすすめ 学問のすすめ』（三十日）に発表。

十一月、「一枚の魔女の図に」を「血と薔薇」十月創刊第一号（一日）に発表。秋山駿との対談「私の文学を語る」を「三田文学」十一月号に発表。

『日本文学全集84 埴谷雄高・堀田善衛集』を集英社より刊行。

十二月、「『死霊』の背景」を「東京新聞」（六日）に発表。

一九六九年（昭和四十四年）五十九歳

一月、「姿なき司祭」を「文芸」一月号から昭和四十五年九月号まで断続的に連載した。「トレードの奇蹟」を「群像」一月号に発表。

二月、「ドストエフスキイの撰取」を読売新聞社『日本近代文学と外国文学』（十日）に発表。

三月、「象徴のなかの時計台」を「群像」三月号に発表。

四月、上総英郎との対談「私と『罪と罰』」（上総英郎、埴谷雄高）を「三田文学」四月号に発表。

五月、「《私》のいない夢」を「文芸」五月号に発表。

六月、「首のない像——ヨーロッパでの感想」を「海」六月号に発表。「革命の変質について」を筑摩書房『戦後日本思想大系6 革命の思想』（埴谷雄高編集、十日）に「解説」として発表。

七月、「還暦祝い」を「東京新聞」（十五日）に発表。

八月、「ルクレツィア・ボルジアー——バルトロメオ・ダ・ヴェネツィアの絵」を「潮」八月号に発表。

十月、「キェルケゴール『あれか、これか』」を「未来」十月号に、「苦悩教の始祖——高橋和巳」を河出書房新社『高橋和巳作品集6 日本の悪霊 他』に巻末論文として発表。

十二月、「暴力考」を「群像」十二月号に発表。谷川健一との対談「『ドグラ マグラ』の形而上性」を三一書房『夢野久作全集6』に「解説対談」として発表。

一九七〇年（昭和四十五年）六十歳

六月、「キェルケゴールの墓」を「辺境」六月創刊号に発表。『闇のなかの黒い馬』を河出書房新社より刊行。

九月、「想像力についての断片」を「人間として」第三号（二十日）に発表。『姿なき司祭 ソ連・東欧紀行』を河出書房新社より刊行。

十月、「記録型の芸術と渴望型の芸術」を「第34回自由美術展」のパンフレットに発表。

十一月、短篇集『闇のなかの黒い馬』により第六回谷崎潤一郎賞を受賞。十七日、帝国ホテルで行なわれた同賞の贈呈式に出席。「文学的近況」として書いた谷崎潤一郎賞受賞の言葉「想像力の操作」を「中央公論」十一月号に発表。

二十五日、三島由紀夫割腹自殺。

十二月、「宇宙型と神人型」を「伝統と現代」十二月号に、「絵画と小説の婚姻」を「文芸春秋」十二月号に発表。

一九七一年（昭和四十六年）六十一歳

一月、「思索的想像力について」を「文芸」一月号に発表。

二月、「「序曲」の頃——三島由紀夫の追想」を「文芸」二月号に発表。

三月、「クービンの絵に寄せて」を「海」三月号に発表。

『埴谷雄高作品集』（全六巻・別巻1、河出書房新社）の配本はじまる。第一回配本として第一巻「死霊」（解説・吉本隆明。解題・白川正芳、以下全巻解題）を刊行。

五月三日、高橋和巳が結腸癌のため死去。密葬ののち、九日、東京・青山斎場において葬儀告別式がおこなわれ、埴谷が葬儀委員長をつとめた。墓碑に彫られた「高橋和巳」は埴谷の筆。「高橋和巳君をいたむ」を「東京新聞」（四日）に、「苦悩の底に精神の高み——高橋君をいたむ」を「読売新聞」（四日）に発表。

六月、古屋健三との対談「『闇のなかの黒い馬』を語る」を「三田文学」六月号に発表。「見えすぎる洞察者」を筑摩書房『武田泰淳全集』第二巻（十八日）に「解説」として発表。「穴のあいた心臓」を「人間として」第六号、高橋和巳を弔う特集号（二十日）に発表。

『埴谷雄高作品集』第二回配本・第三巻「政治論文集」（解説・鶴見俊輔）を河出書房新社より刊行。

十二日、高橋和巳をしのんで、早稲田大学文学部文芸科で特別講義をする。

七月、「破局への参加——高橋和巳への追悼」を「世界」七月号に、「小さな生の焰」を「群像」七月号に、「断片的な回想」を「現代の眼」七月号に、「『悲の器』の頃」を「文芸」七月臨時増刊、高橋和巳追悼特集号（五日）に発表。「不思議な哲学者——安岡章太郎」を講談社『安岡章太郎全集VII アメリカ感情旅行』月報7（二十四日）に発表。

八月、『埴谷雄高作品集』第三回配本・第二巻「短篇小説集」（解説・秋山駿）を河出書房新社より刊行。

「高橋和巳をしのんで」を「早稲田文学」八月号に、「招かれざる酒客——草野心平」を季刊詩誌「無限」第28号（一日）に発表。

十一月、「国士竹内好」を筑摩書房『現代日本文学大系78中村光夫・臼井吉見・唐木順三・竹内好集』月報58（五日）に発表。「青年辻邦生」を河出書房新社『新鋭作家叢書 辻邦生集』月報1（三十日）に発表。

十二月、『埴谷雄高作品集』第四回配本・第四巻「文学論文集」（解説・井上光晴）を河出書房新社より刊行。

この頃から、歩いているうちに気持ちが悪くなることが多くなり、東京・武蔵境の日赤武蔵野

病院へ毎週通うことになる。病名は動脈硬化による虚血症。

一九七二年（昭和四十七年）六十二歳

一月、「心電図の波」を「文芸」一月号に発表。

二月、「古い文章『農民委員会の組織について』」を「未来」二月号に発表。「農民委員会の組織について」は「農民闘争」昭和六年五、六月合併号（農民闘争社刊）が初出である。

『埴谷雄高作品集』第五回配本・第六巻「随想集」（解説・倉橋由美子）を河出書房新社より刊行。

四月、「アフォリズムの由来」を「ユリイカ」四月臨時増刊号、萩原朔太郎特集（二十日）に、「『夢十夜』について」を集英社『漱石文学全集 第七巻 行人』月報（二十五日）に発表。

十六日、川端康成自殺。

五月、『埴谷雄高作品集』第六回配本・第五巻「外国文学論文集」（解説・大江健三郎）を河出書房新社より刊行。

五日、京都会館における「高橋和巳を偲ぶ文芸講演会」（河出書房新社主催）で秋山駿、真継伸彦とともに講演。

六月、「全身小説家、井上光晴」を筑摩書房『現代日本文学大系87 堀田善衛・遠藤周作・井上光晴集』月報70

（十日）に発表。

大江健三郎との対談「革命と死と文学」を「世界」六月号に発表。

『橄欖と瑩窟』を未来社より刊行。

八月、「安保闘争と近代文学賞」を「現代詩子帖」八月臨時増刊（十五日）に発表。

九月、「米の味」を「すばる」秋、第九号（十日）に発表。

十月、白内障手術のため慶応義塾大学付属病院に入院。十一月六日に手術、十一月末に退院。

十一月、「プーシキンの銅像」を河出書房新社『プーシキン全集2 オネーギン・物語詩II』月報II（十日）に発表。

十二月、『欧州紀行』を中央公論社より刊行。『欧州紀行』は『姿なき司祭 ソ聯・東欧紀行』と対になる西欧紀行である。

一九七三年（昭和四十八年）六十三歳

一月、「強い芯を備えた隠者——山室静」を冬樹社『山室静著作集 第六巻 藤村論考』月報6（三十日）に発表。

三月、『現代の文学3 埴谷雄高 椎名麟三』を講談社より刊行。

二十八日、椎名麟三が脳出血のため死去した。三鷹教会で行なわれた葬儀の葬儀委員長をつとめる。「椎名麟三を悼む」を「読売新聞」（三十日）に発表。

四月、『埴谷雄高評論選書』全三巻（立石伯編）を六月にかけて講談社より刊行。

六月十日、富士霊園でおこなわれた椎名麟三の納骨式に椎名夫人、武田泰淳夫妻らと夫妻で出席。

九月、「農民闘争」とその後」を宮内勇著『ある時代の手記』（三十日、河出書房新社）に「跋」として発表。

十月、「感覚人、島尾敏雄」を「國文學 解釈と教材の研究」十月号に発表。

十二月八日、日本女子大学「詩と童話のまつり」で講演。

一九七四年（昭和四十九年）六十四歳

二月、「戦後文学の党派性」を「群像」二月号に発表。

三月、「戦後文学の党派性、補足」を「群像」三月号に発表。

二十八日、午後六時半より東京・神楽坂の日本出版クラブ会館で開かれた「あさって会」「たねの会」共催の「椎名麟三を偲ぶ会」（仮称）に出席。

四月、「伊藤さんの予言」を新潮社『伊藤整全集15 感動の再建 他』付録（十五日）に発表。

『黙示と発端』を未来社より刊行。

五月、「ブレークの歳言」を「ちくま」第61号（二十日）に発表。

九月二十三日、花田清輝が脳出血のため死去した。翌々日、自宅で行なわれた告別式において、埴谷は弔辞を述べた。

十月四日、新日本文学学校で、「文学の世界」講演。

十一月、「強力な原子核——花田清輝への弔辞」を「群像」十一月号に発表。

十二月、「花田清輝との同時代性」を「文藝」十二月号に発表、「エルンストの《物霊》」をマックス・エルンスト著、巖谷国士訳『百頭女』付録「マックス・エルンスト頌 百頭女のために」（二十五日、河出書房新社）に発表。

一九七五年（昭和五十年）六十五歳

一月、「心電図のその後」を「文藝」一月号に発表。

五月十三日、京都大学で開催された「高橋和巳を偲び現代世界を考える集会」で小田実、秋山駿、真継仲彦とともに講演。

六月、「井上光晴の「最高！」」を筑摩書房『筑摩現代文学大系85 井上光晴 高橋和巳集』月報4（二十日）に発表。

文化人十二名が発起人となって六月二十七日付で発表した「革共同両派への提言」の発起人の一人に加わる。

七月、「夢魔の世界——『死霊』五章」二七〇枚と「『死霊』の掲載について」を「群像」七月号に同時に発表。

十九日、六月二十七日付の「革共同両派への提言」が受け入れられなかったあとを受け、「革共同両派への再提言」がなされた。

八月、座談「革命と文学——戦後三十年」（武田泰淳、小田実、埴谷雄高）を「群像」八月号に発表。

九月、吉本隆明との対談「意識 革命 宇宙」を「文藝」九月号に発表。

『鐘と遊星』を未来社より刊行。『意識 革命 宇宙』を河出書房新社より刊行。

十月、大岡昇平との対談「〈少年〉と〈夢魔〉」を「文芸展望」十月号に発表。

十一月、座談「思索的渴望の世界」（吉本隆明、秋山駿、埴谷雄高）を「海」十一月号に発表

。

一九七六年（昭和五十一年）六十六歳

一月、『思索的渴望の世界』を中央公論社より刊行。

四月、「影絵の時代」を「文藝」四月号から昭和五十二年六月号にかけて連載。これは幼少年期から敗戦までを回想した『影絵の世界』の続編にあたる。

『死霊 全五章』を講談社より刊行。

五月十五日、京都大学時計台ホールで行なわれた「高橋和巳を偲び、埴谷雄高『死霊』刊行を契機にして、現代を考える集会」で講演。

六月、『石棺と年輪』を未来社より刊行。

『死霊 全五章』（講談社）で新潮日本文学大賞を受賞。東京・赤坂のホテルオークラで贈呈式（九月）が行なわれた。

九月、「二人のドン・キホーテ——壇一雄と私」を「新潮」九月号に発表。

十月五日、武田泰淳は胃癌のため死去。十日、東京・青山斎場で葬儀が行なわれた。

十一月、『戦後の文学者たち』を構想社より刊行。

十二月、「最後の二週間」を「海」十二月特別号に、「「お花見会」と「忘年会」」を「展望」十二月号に、「初期の頃」を

「文藝」十二月号に発表。「精神のリレー」を河出書房新社『精神のリレー 講演集』（十五日）に発表。座談「武田泰淳・人と作品」（大岡昇平、野間宏、埴谷雄高）を「群像」十二月号に発表。

対談集『天啓と窮極』を未来社より刊行。

一九七七年（昭和五十二年）六十七歳

二月、この頃、竹内好の療養の長期化が予想されるようになり、桑原武夫、鶴見俊輔、中野清見、増田渉、埴谷が発起人となった「竹内好の会」をつくり、知友にあてて、経済的援助の呼びかけをした。埴谷が呼びかけの手紙文を書いた。三月三日、竹内は食道癌のため死去。告別式は十日、東京・新宿の千日谷会堂で行なわれた。埴谷は葬儀委員長をつとめた。

四月、「江藤淳のこと」を「文藝」四月号に発表。

五月、「竹内好の追想」を「群像」五月号に発表。

三日、東京・赤坂の無量院で開催された高橋和巳の七回忌に出席、文学の今後の運命についてスピーチをした。

八月、近代文学同人編『「近代文学」創刊のころ』を深夜叢書社より刊行。この本に「敗戦前の数箇月」を発表。

九月、『影絵の時代』を河出書房新社より刊行。

十月、「『近代文学』と戦後文学の自前性」を「朝日新聞」（二十四日）に発表。

十一月、『蓮と海嘯』を未来社より刊行。このなかに「武田泰淳と百合子夫人」を発表。

一九七八年（昭和五十三年）六十八歳

一月、「『「近代文学」創刊のころ』のこと」を「群像」一月号に発表。

二月、『現代日本文学大系74 埴谷雄高・藤枝静男集』を筑摩書房より刊行。

二十五日、『花田清輝全集』（講談社・全十五巻別巻二）の刊行を記念して、東京・新宿の紀伊国屋ホールで、新日本文学会の肝入りで開催された「花田清輝を語る」で講演。

三月、九山真男との対談「文学と学問」を「ユリイカ」三月号に発表。

『闇のなかの思想』を潮出版社より刊行。

四月、「「ますだ」の一夜」を「日本小説を読む会」会報に、「ドストエフスキへの感謝と困惑」を新潮社『ドストエフスキー読本』に発表。

三日、平野謙がクモ膜下出血のため、死去した。十二日、東京・青山斎場で行なわれた告別式に参列。

五月、『薄明のなかの思想——宇宙論的人間論』を筑摩書房より刊行。

六月、「二つの大患」を「新潮」六月号に、「弔辞 平野謙」を「海」六月特別号に発表。座談会「平野謙・人と文学」（藤枝静男、本多秋五、野間宏、荒正人、埴谷雄高）を「群像」六月号に発表。

九月、『埴谷雄高作品集』第七回配本・第七巻「戦後文学論集Ⅰ」（解説・桶谷秀昭）を河出書房新社より刊行。

十一月、『埴谷雄高作品集』第八回配本・第八巻「戦後文学論集Ⅱ」（解説・日野啓三）を河出書房新社より刊行。

一九七九年（昭和五十四年）六十九歳

四月、「中野重治とのすれちがい」を筑摩董房『中野重治全集』第十四巻月報25（二十五日）に発表。

五月、「井上光晴と文学伝習所」を「国文学 解釈と鑑賞」五月号に発表。

『埴谷雄高作品集』第九回配本・第九巻「戦後文学論集Ⅲ」（解説・真継伸彦）を河出書房新社より刊行。

三十一日、東京・新橋の第一ホテルで「平野謙を偲ぶ会」を催し、挨拶する。のちに『平野謙を偲ぶ』（昭和五十四年八月三十一日、発行者・発行所 平野田鶴子 「平野謙を偲ぶ会」発起人一同）が刊行された。

六月九日、荒正人が脳血栓のため死去。十一日、佐々木基一葬儀委員長で、自宅にて行なわれた葬儀・告別式に出席。

七月、『埴谷雄高ドストエフスキ全論集』を講談社より刊行。

八月、「「終末の日」」を「群像」八月号に発表。

『埴谷雄高作品集』第十回配本・第十一巻「紀行文集」（解説・小川国夫）を河出書房新社より刊行。

九月、『光速者——宇宙・人間・想像力』を作品社より刊行。

十月、島尾敏雄との対談「原典としての「南」」を「国文学 解釈と鑑賞」十月号に発表。

十一月、『埴谷雄高作品集』第十一回配本・第十二巻「映画論集」（解説・澁澤龍彦）を河出書房新社より刊行。『埴谷雄高準詩集』を水兵社より刊行。

一九八〇年（昭和五十五年）七十歳

二月、座談「戦時下の転向と抵抗」（埴谷雄高、宮内勇、聞き手・栗原幸夫）を「運動史研究」5（十五日）に発表。

三月、『埴谷雄高作品集』第十二回配本・第十三巻「回想・思索集」（解説・森川達也）を河出書房新社より刊行。

七月、『埴谷雄高作品集』第十三回配本・第十四巻「対談Ⅰ」（解説・辻邦生）を河出書房新社より刊行。

八月、『内界の青い花 病と死にまつわるエッセイ』を作品社より刊行。

十二月、『天頂と潮汐』を未来社より刊行。

一九八一年（昭和五十六年）七十一歳

一月、『埴谷雄高作品集』第十四回配本・第十五巻「対談Ⅱ」（解説・磯田光一）を河出書房新社より刊行。

二月七日、東京・渋谷の日本キリスト教団東京山手教会において、「ドストエフスキー死後百年祭」（ロシア手帖の会主催、新潮社協賛）が開かれ、講演。

四月二十五日、早稲田大学で開催された日本近代文学会の研究会「平野謙をめぐって」で三人の講師の一人として最後に講演。この日、敏子夫人は自宅で体調がよくないとベッドにいたが、

夕方、救急車で日赤武蔵野病院へ入院した。午後九時過ぎ嘔吐し容態が急変。集中治療室で加療を続けられるが、意識が戻ることなく五月一日早朝、脳血栓で死去。享年七十二歳。

六月、「箴言」を筑摩書房『柳宗悦全集』著作篇第4巻月報8（五日）に発表。

八月、「回想の平野謙」を「文学」八月号に発表。

九月、『死霊 六章』、『死霊Ⅰ』、『死霊Ⅱ』を講談社より刊行。

十月、特装本『不合理ゆえに吾信ず』を成瀬董房より刊行。

十一月、間き手・柘植光彦で「作家埴谷雄高の形成——未発表の幼少年期体験」を「國文學解釈と教材の研究」十一月号に発表。「土湯の一夜——佐藤民宝の思い出」を「盆地」第二十八集（十日）に発表。

一九八二（昭和五十七年）七十二歳

一月、大岡昇平との連載対談「二つの同時代史」を「世界」に一月号から翌年の十二月号まで連載。

六月、「ワーゴさんの翻訳に添えて」を「翻訳の世界」六月号に発表。

七月、「無停止型お喋り症」を「海」七月号に発表。

九月、「『想像力についての断片』の英訳について——ワーゴさんへの感謝とお詫び」を「翻訳の世界」九月号に発表。

『鑑賞 日本現代文学第30巻、埴谷雄高・吉本隆明』を角川書店より刊行。

十月、北社夫との対談『さびしい文学者の時代』を中央公論社より刊行。

十二月、小川国夫との対談『闇のなかの夢想[映画学講義]』を朝日出版社より刊行。

一九八三年（昭和五十八年）七十三歳

一月、「大運河の原型」を「海燕」一月号に、「喋りづめの一年」を「文藝」一月号に発表。

十一月、栗坪良樹との対談「もっと暗黒を！」を「すばる」十一月号に発表。

一九八四年（昭和五十九年）七十四歳

一月、「お喋りの終焉」を「文藝」一月号に発表。この作品で「お喋りの終焉」を明言したが、沈黙はほぼ三年間で、昭和六十一年には再開している。

二月、「加賀乙彦のこと」を潮出版社『加賀乙彦短篇小説全集1 くさびら譚』月報1（十日）に発表。

四月、『戦後の先行者たち』を影書房より刊行。

五月、『暈と極冠』を未来社より刊行。

六月、「「構想」小史」を復刻『構想』（言叢社）の別冊「「構想」と私」（十五日）に発表。

。

七月、『大岡昇平・埴谷雄高 二つの同時代史』を岩波書店より刊行。

十九日、梅崎春生の二十回忌の命日にあたるこの夜、東京・神田の山の上ホテルで開かれた「幻化忌——梅崎春生を偲ぶ会」でスピーチ。

九月、「「構想」の復刻」を「東京新聞」（一日）に発表。

十月、「《最後の審判》——『死霊』七章」三百六十枚と「《最後の審判》に添えて」を同時に「群像」十月号に、「幻化忌のこと」を「海燕」十月号に発表。

この頃、東京・九段の料亭で「構想」の同人会「老鰻会」を開いた。「構想」全七冊の復刻、また埴谷が「《最後の審判》——『死重』七章」の発表で一区切りついたこともあっての会だった。

十一月、『死霊 七章』を講談社より刊行。

一九八五年（昭和六十年）七十五歳

一月、「やけの「いたずら」——《最後の審判》の一内密」を「海燕」一月号に発表。

二月、「政治と文学と——吉本隆明への手紙」を「海燕」二月号に発表。

四月、「政治と文学と・補足——吉本隆明への最後の手紙」を「海燕」四月号に発表。

五月、『「死霊」論 頭蓋のシムフォニイ』（白川正芳編）を洋泉社より刊行。同書序文に「魔の山の中腹で」を発表。

八月、「私と「戦後」——時は過ぎ行く」を「群像」八月号に発表。

一九八六年（昭和六十一年）七十六歳

一月、「ラインの白い霧とアクロポリスの円柱」を「海燕」一月号に発表。

二月、『ラインの白い霧とアクロポリスの円柱』を福武書店より刊行。

四月、対談集『覚醒と寂滅』を未来社より刊行。

九月、「月光のなかで——『死霊』八章」を「群像」九月号に発表。

十月、「土方巽のこと」を「アスペスト館通信」第1号（十五日）に発表。

十一月、『死霊 八章』を講談社より刊行。

十二日、島尾敏雄が出血性脳梗塞のため死去。「島尾敏雄を悼む」を「読売新聞」（十四日）に発表。

一九八七年（昭和六十二年）七十七歳

一月、「思い違い」を「海燕」一月号に、「島尾敏雄とマヤちやん」を「群像」一月号に、「感覚の全的昇華——島尾敏雄の思い出」を「新潮」一月号に発表。

二月、『埴谷雄高作品集』第十五回配本・第十巻「ドストエフスキイ論集」（解説・加賀乙彦）を河出書房新社より刊行。「「ドストエフスキイ論」のこと」を同書に書き下ろしで発表。

三月、「沈着者・小田切秀雄」を「日本文学誌要」第三十六号・小田切秀雄教授退職記念特別号（三日）に発表。

十二日、日赤武蔵野病院で、まだ手術をしていない右眼に人工水晶体を入れる手術をした。

六月、「ローレンスの「大審問官」」を「ロシア手帖」第24号（二十日）に発表。

九月、「富士正晴のこと」を「群像」九月号に、「最低の摩訶不思議性」を「中央公論」九月号に発表。

十月、「異種精神族・澁澤龍彦——癌と医者運」を「海燕」十月号に発表。

十二月、「両端者・磯田光一」を「現代詩手帖」十二月臨時増刊に発表。磯田光一は二月五日、心筋梗塞のため、死した。

一九八八年（昭和六十三年）七十八歳

一月、「記憶——続・思い違い」を「海燕」一月号に発表。

二月、「花幻忌と邂逅忌」を「三田文学」冬季号（一日）に発表。

三月、「初期の石川淳」を「海燕」三月号に発表。石川淳は、前年の十二月二十九日、肺癌による呼吸不全のため、死去した。「独り暮らし」を「樹木」vol.6（十七日）に発表。

五月、「『メールストレームの渦』」を「群像」五月号に、「遅すぎる礼」を講談社『追悼 野間惟道』（三十日）に発表。

六月、「難解者」を「本」六月号に発表。

九月、「阿部さんの思い出——附・安部公房のこと」を一穂社『阿部六郎全集』第二巻月報（二十日）に発表。

十月、小川国夫との往復書簡集『隠された無限——〈終末〉の彼方に』を岩波書店より刊行。

十二月、「戦争と革命の変質の婚姻——パブーフ、マフノ、クロンシェタットと招待宴席と元帥服」を「思想の科学」十二月号に発表。

二十五日、大岡昇平が脳梗塞のため死去した。

一九八九年（昭和六十四年、平成元年）七十九歳

一月七日、天皇逝去。平成と改元。

「謎とき『大審問官』——続続・思い違い」を「海燕」一月号に発表。

二月、「深夜のマラルメ」を筑摩書房『マラルメ全集Ⅱ ディヴァガシオン他』月報1（二十五日）に発表。

三月、「アナキストとアナーキスト——秋山清追悼」を「彷徨月刊」三月号に、「妄念の出発点——無限——自分と出会う」を「朝日新聞」（二十七日）に、「包容者・草野心平」を思潮社『現代詩読本——特装版 草野心平るるる葬送』（一日）に、「夜の階段ふう燈火」を「兄弟」創刊号（二十五日）に発表。

六月、「中野重治との同時代性——『敗戦前日記』を読む」を「中央公論文芸特集」夏季号に発表。

十日、早稲田大学で行われたドストエーフスキイの会発足二十周年を記念する会で講演。講演会終了後に大隈会館の和室で催された懇親会に埴谷も出席し、質問に答えた。

九月、「ドストエーフスキイ後の作家の姿勢」を「ドストエーフスキイの会 会報」№110（二十九日）に発表。

十月二十四日、法政大学で行われた中野重治没後八年研究と講演の会で講演。

十一月、「中野重治と戦後文学」を武蔵野書房『中野重治と私たち——「中野重治研究と講演の会」記録集』（十一日）に発表。

十日、ベルリンの壁が崩壊。

十二月、「三つの火」を大岡昇平著『わがスタンダール』（十日、講談社文芸文庫）に「著者に代わって読者へ」として発表。

体調すぐれず、翌年にかけて、日赤武蔵野病院で検査の結果、胃にポリープが発見されて手術した。

一九九〇年（平成二年）八十歳

一月、「老人性癩癩——続続続・思い違い」を「海燕」一月号に発表。

四月、『難解人間 v s 躁鬱人間』を中央公論社より刊行。『謎とき『大審問官』』を福武書店より刊行。

七月、『雁と胡椒』を未来社より刊行。

十一月、「雨颱風と浜名湖会」を「未来」十一月号、十二月号、平成三年一月号に連載。

対談集『無限と中軸』を未来社より刊行。

十二日、「埴谷雄高の全業績」に対し第二十八回藤村歷程賞を受賞。

十二月二十二日、心臓病で日赤武蔵野病院に入院。集中治療室に入り、心臓の電気ショック療法により回復した。数日前、自宅の部屋で呼吸不全になった。

一九九一年（平成三年）八十一歳

一月二日、野間宏が食道癌のため、死去した。

「野間宏を悼む」を「読売新聞」（四日）に発表。「しごとの周辺」を「朝日新聞」に次のとおり七回にわたって発表した。七日「睡り」、八日「夢」、九日「水」、十日「水彗星」、十四日「食物連鎖」、十六日「心電図の映像」、十七日「電気ショック」。

前年十二月二十二日から心臓病で入院していた日赤武蔵野病院を退院。

二月、『滑車と風洞』を未来社より刊行。

三月、「ロータス賞の頃」を「海燕」三月号に、「持続者・野間宏」を「群像」三月号に、「心臓の電気ショック療法」を

「中央公論文芸特集」春季号に発表。

七月、「先斃者サルトル——鎮魂の言葉」を思潮社『現代詩手帖特集版 いま、サルトル——サルトル再入門』（十日）に発表。

八月、『重力と真空』を未来社より刊行。

九月、「45の質問」を「鳩よ！」九月号に発表。

一九九二年（平成四年）八十二歳

一月、「ラムボオ素描」への後註」を思潮社『現代詩手帖特集版 ランボー、一〇一年』（二十日）に発表。

三月、「変革の時代に」を「東京新聞」に次のとおり四回にわたって連載した。十六日「生と生存」、十七日「プラスとマイナス」、十八日「フェミニズム」、十九日「人為淘汰」。

五月、「自由追求の三十年」を「日本近代文学館」会報 第127号（十五日）に発表。埴谷は日本近代文学館理事だった。

三十日、井上光晴が死去した。六月八日、告別式で埴谷が葬儀委員長をつとめた。

六月、「ひきもどされた生」を「朝日新聞」（一日）に発表。

八月、「同時代者・井上光晴」を「群像」八月号に、「超発想者・井上光晴」を「文藝」秋季号に発表。

「古い回想」を『ある軌跡——未来社40年の記録』（三十日）に発表。

一九九三年（平成五年）八十三歳

二月、「突出したアヴァンギャルド作家——追悼 安部公房」を「週刊読書人」（八日）に発表。「最後の一局——追悼 北村太郎」を「現代詩手皓」二月臨時増刊（十日）に発表。

三月、「アベコベの逆縁」を「海燕」三月号に発表。「旧著再読——『イリュミナシオン』」を季刊「リテレール」第4号

（一日）に発表。

四月十六日、藤枝静男が、死去した。

二十五日、佐々木基一が死去。葬儀、告別式は二十八日。埴谷は弔辞を述べた。

「無際限飛行の同行者たちへ」を「読売新聞」（二十七日）に発表。

五月、「宇宙で見るべき夢の絵」を「版画芸術」80号（十日）に発表。

二十七日、武田百合子が死去。埴谷が弔辞を述べた。

七月、「弔辞 藤枝静男」を「文学界」七月号に発表。

九月、「佐々木基一の昇華」を佐々木基一著『私のチェーホフ』（十日、講談社文芸文庫）に「著者に代わって読者へ」として発表。「武田百合子さんのこと」を「中央公論文芸特集」秋季号に発表。

十一月、「立花隆のこと」を『立花隆の25年』（十五日）に発表。

一九九四年（平成六年）八十四歳

一月、「時は武蔵野の上をも」を「現代思想」一月号に、「違和感なく融合」を三一書房『芭蕉をく読む』（山形新聞社編集局編、三十一日）に発表。

三月、『幻視者宣言』を三一書房より刊行。

五月、「机龍之介」を新潮社『新潮日本文学アルバム37 中里介山』（十日）に発表。

六月、「二十一世紀作家」を「ユリイカ」六月号に発表。

井上光晴、埴谷雄高出演の映画「全身小説家」（原一男監督）が完成し、映画館で一般公開され、のちにビデオ化された。

七月、「映画・全身小説家井上光晴」を「群像」七月号に発表。

九月、栗原一夫との対談集『埴谷雄高 語る』を河合文化教育研究所より刊行。

三十日、武田百合子が亡くなってから一年以上経ち、東京・新宿の東京ヒルトンホテルで「武田百合子さんを偲ぶ会」（埴谷雄高は発起人の一人）が行なわれた。埴谷は体の具合がよくなり

て欠席したが、挨拶文「鬼ごっこをして隠れている百合子さん」が中村稔によって代読された。この秋から『武田百合子全作品集』（中央公論社）全七巻の刊行が始まり、埴谷は「推薦のこたば」をパンフレットに寄せている。

十二月、樋口覚との対談集『生老病死』を三輪書店より刊行。

一九九五年（平成七年）八十五歳

一月、正月にNHK教育テレビ・ETV特集「埴谷雄高独白・『死霊』の世界」に出演、五日連続で放映された。

二月、前立腺手術のため日赤武蔵野病院に入院。

四月、「追悼 谷川雁」を「すばる」四月号に発表。

五月、『虹と睡蓮』を未来社より刊行。

「弔辞 佐々木基一」と「弔辞 武田百合子」を『虹と睡蓮』に発表。

日赤武蔵野病院を退院。元気になったら、自宅に戻らず、ホテルに籠もって「『死霊』九章」の執筆に専念する、と表明していた。だが、考えが変わり、自宅へもどる。それから間もなく、『死霊』第九章を終わらせた。七月、『死霊』第九章は、「誕生日にて――『死霊』九章」となっており、原稿は二百字詰原稿用紙で二一九枚だった。以後断章で『死霊』を書く。

八月十二日、『死霊』断章の第一回分、「根源と窮極」二百字詰原稿用紙で九枚が完成。

九月、『螺旋と蒼穹』を未来社より刊行。

十一月、「《虚体》論――大宇宙の夢 『死霊』九章」を「群像」十一月号に発表。二百字詰原稿用紙に書かれたときのタイトルは「誕生日にて――『死霊』九章」となっていた。「群像」発表時に変更された。

十二月、『死霊 九章』を講談社より刊行。

二十一日、午前、「吉祥寺独語」の冒頭「私の独語、それが同時に」で始まる文章を書いた。同日、散髪中に貧血で意識を失う。

一九九六年（平成八年）八十六歳

一月、「『死霊』断片」（最初は「『死霊』断片」であったが、埴谷の希望で「死霊」断章）に変わった）の執筆を続けた。

二月、『埴谷雄高・吉本隆明の世界』を朝日出版社より刊行。

四月、対談集『超時と没我』を未来社より刊行。

立花隆との対談集『生命・宇宙・人類』を角川春樹事務所より刊行。

五月、対談集『跳躍と浸潤』を未来社より刊行。

二十二日、東京都三鷹市の三鷹ホテルベルモンドで『埴谷雄高全集』の第一回編集委員会が開催される。出席者は編集委員の大江健二郎、小川国夫、辻邦生、鶴見俊輔、白川正芳（本多秋五委員は欠席）、講談社側から役員、部長、担当者など四人。埴谷は当日体調が思わしくなく欠席した。

六月、対談集『瞬発と残響』を未来社より刊行。

七月、ウオリンスキイ著、埴谷雄高訳『偉大なる憤怒の書』が復刻され、『ドストエフスキイ文献集成』16（大空社刊）に収録された。

八月、「死霊」断章（一）」を「群像」八月号に発表。

九月、「死霊」断章（二）」を「群像」九月号に発表。

二十六日、午後、「群像」から届いた「芸術の自己成長」の校正刷りを茶の間で見る。そのあと「死霊」断章（四）」を四枚書く。

十月、「芸術の自己成長」を「群像」十月号に発表。

十一月、「死霊」断章（三）」を「群像」十一月号に発表。

十二月、「死霊」断章（四）」を「群像」十二月号に発表。

「変幻者」を岩波書店『ソクラテス以前哲学者断片集 第1分冊』付録1（五日）に発表。

ディオグネス・ラエルティオス著『ギリシア哲学者列伝』（上中下岩波文庫）は晩年の埴谷の愛読書の一冊だった。

一九九七年（平成九年）八十七歳

二月十九日午前十時四十五分、脳梗塞のため、東京都武蔵野市吉祥寺南町二の十四の五の自宅で死去した。享年八十七歳。

四月、「死霊」断章（五）」を「群像」四月号に「遺稿」として発表。

二〇〇〇年（平成十二年）

五月二十日、福島県相馬郡小高町に「埴谷島尾記念文学資料館」開館。